

銘木市に見られる北海道産広葉樹材

(5) ニレ

道総研林産試験場 佐藤 真由美



アイヌの物語では、地上に最初に生まれた樹木がハルニレで、ハルニレ姫に惚れた雷神が、天上から姫のもとに落ちこちてきたことで人間の祖先神が生まれたと伝えられています（樹木への落雷で人間が使える火が手に入ったということでしょうか）。ハルニレの木材が火おこしに用いられたことがこの神話の背景と思われるのですが、古来身近な樹木であったことがうかがえます。

北海道に天然分布するニレ類は、ハルニレとオヒョウ（オヒョウニレ）の2種類が知られていますが、圧倒的に有名なのが大径木に育つハルニレで、林業・木材業界で「ニレ」と言えば、まずハルニレです（本稿では、木材の流通名として「ニレ」、樹木の標準和名として「ハルニレ」と使い分けます）。オヒョウはアイヌ民族が樹皮の繊維で布（アトウシ）を織り衣服を作ってきたという文化的価値がありますが、やや細身なので、木材資源としてはあまり注目されません。広葉樹材を扱う業者から「ニレ材の中に感じの違うのが混ざっている」と林産試験場に持ち込まれるものの多くがオヒョウと思われるのですが、実は、樹種識別の常とう手段である顕微鏡観察では、両者の違いはそもそも変異の大きい道管の寸法くらいで、際立った識別点はありません。かえって、材色では同じ褐色でもハルニレは赤みが感じられる一方、オヒョウではややモノトーン系に見えることが多く、オヒョウのほうが道管が小さめなので木目が「おとなしい」といった、肉眼による印象のほうが見分けやすいように思われます。

ハルニレは、河川敷や扇状地末端の湧水地周辺といった比較的水気の多い場所で育ち、直径1m超級の巨木になります。ヤチダモもそうですが、水気の多い場所に育つ樹種は、他の樹種では一般に含水率が低い心材部の含水率が比較的高めのものがあり、わざわざ多湿心材と称される特徴となっています。使う側にしてみれば、乾燥が難しい、悪臭があるなど、あまりありがたいところもありますが、先人たちの知恵と努力で利用されてきました。明治末期に出版された木材の利用法に関する書物¹⁾では、ハルニレ材は「材が堅く重く割れにくい→荷車のこしき（車輪のスポークを受け、車軸に連結する輪状の部品）、音響の伝導に適する→太鼓の胴（ケヤキの代用）、材の圧縮強さ→下駄」と記されてい

ます。ヘビーデューティな車両部品に実用的に用いられていたのなら、フローリングや器具材、スポーツ用品にも活路があるのではないかと考えます。

銘木市では、毎回、比較的太いニレ原木が出品されます（写真1）。同じような径級の環孔材樹種であるナラやタモに比べると、「白太（辺材）」が薄く、年輪幅も比較的狭くそろった良材に見えるのですが（写真2）、案外高値が付かない状況です。前述のように、河川沿いや平地に多かったハルニレの大木は、開拓当初の平野部で、他の広葉樹と同様、支障木として伐採されたと想像されます。その後、インチ材などの需要が出て山奥までどんどん伐採されたナラに比べ、選択的に伐られるほどでもなく残され、現在、高齢になって出てきているものもあるでしょう。



写真1 ニレ原木（2017年3月）



写真2 ニレ原木（木口）

コンスタントに太い原木が出ることは資源として優れているのですが、何かひとつ「ニレでなければ」という用途がないと、買い手としても選びづらいのだと思います。

昔は、本州方面の広葉樹銘木であるケヤキやクワなどの代替材とされていましたが、それらの用途は、幅広の一枚板で化粧建具や天板などに珍重されるケヤキはともかく、クワがそもそもあまり大木にはならないこともあり、大きいものでも茶だんす、大抵は器や茶托など小物が主だったのではないかと察します。材色が落ち着いた濃褐色で繊細な模様を含み、筆者は「渋い！」と称賛するのですが、侘び寂びを好む数寄者文化では、ケヤキだのクワだのといった樹種の知名度をありがたがるきらいがあり、代替材としてのニレは、民家の居間にさりげなく溶け込んでいる場合が多かったのではないのでしょうか。

9月ごろの夏場の市に「神代（じんだい）ニレ」が出品されることがあります（写真3）。ハルニレやヤチダモといった川の近くに多く生育する樹種が、神様の時代（古くても数千年以内と考えますが）に、洪水や土石流に巻き込まれて川底に埋もれ、長い年月を経て材色が濃い灰緑色に変わったものを神代と称します。本来は、こういうものが「銘木」だったのでしょうが、強度的には若干もろくなっていて、装飾的な用途にほぼ限られ、河川工事で偶然発見される希少性にも関わらず、思うほどには値が高くないのは残念です。重機で引き上げ、泥や砂利にまみれた上に、根が付いたり折れたりしている不定形のものから、銘木市に並べる丸太を切り出すにも相当な苦勞を伴うと思うのですが、あまり報われないようです。林産試験場では、数十年前に化学処理により通常の広葉樹材を神代風の色合いにする研究をしています²⁾、現状ではそこまでして「神代もどき」を作るメリットは無いように思われます。

色の好みは時勢により変化すると言われます。経済が好調な時は華やかな明るい色が好まれ、不景気になるとモノトーンや落ち着いた色が選ばれる傾向があるとされています³⁾。ポジティブな言い方をすれば、社会が円熟してくると、重厚な安定感を醸し出す濃い色が好まれるとも言えそうです。企業でも、新しい会社のオフィスは明るく軽快なイメージで、老舗になると特に社長室のしつらえなどはどっしり構えた黒っぽいイメージになる傾向があります。現在の日本では、経済成長率は辛うじてプラスで安定してきていたものが、コロナ禍で急降下しました。落ち着いた濃色を持つニレの出番かと思いきや、先の見通せない中で外出もままならず、消費者が家具などの大きな買い物を控えている間



写真3 「神代ニレ」 (2012年9月)

に、パンデミックも落ち着いてきて、経済指標も上向きに転じつつあります。加えて、巣ごもり経験から、内装、家具は明るい色にしたいという心情は理解できます。北海道のイメージが、雪や白樺林などの「白」をセールスポイントにしている実態もあり、現在の風潮は明るい色なのかな、と感じています。ただ、ひたすら白くても締まりがないので、ところどころに濃色（敢えてウォールナットとは言いませんが・・・）のアクセントを配置するなど、家具でもインテリアでもデザインが重要です。色合い、木目、質感のバラエティーに富んだ素材を取り揃え、いつでも活用できる広葉樹材の可能性の広さは、北海道の森林の豊かさに支えられているものです。多様性、個性を大事にするようになってきた昨今、ニレのような飾り気のない深い味わいを求めるユーザーも増えてくるのではないのでしょうか。自然派カフェの経営を計画している知人が、天然木で無塗装のテーブルを使いたいというので、コーヒーの染みが目立ちにくいニレを「推し」しているところです。

■参考文献

- 1) 農商務省山林局編：「木材ノ工藝的利用」，大日本山林会，東京，p. 1216 (1912) .
- 2) 梅原勝男，峯村伸哉，佐藤光秋：日本木材学会北海道支部講演集，10，pp. 17-18 (1979) .
- 3) (一社)日本流行色協会，<https://www.jafca.org/colorcolumn/20140301-002.html> など(2021年9月閲覧)